

貨幣の現象学(下)

——マルクス価値論のプロブレマティーク(3)——

向 井 公 敏

- I 問題の所在
- II 価値形態論の課題と労働価値論
 - 1 貨幣以前の価値実体論
 - 2 マルクスと宇野
 - 3 初版本文における新たな実体概念の創造
- III 価値形態論の課題と貨幣商品説
 - 1 貨幣以前の価値形態論
 - 2 マルクスとベイリー
 - 3 初版本文における二つの価値形態論 (以上本誌第46巻第5・6号)
- IV 価値形態論の課題と論理＝歴史説
 - 1 初版本文形態IVにおける貨幣導出のアポリア
 - 2 貨幣以前の交換過程論
 - 3 マルクスとポランニー
 - 4 初版本文における価値表現の「回り道」
- V 第2版における価値形態論叙述の通俗化
 - 1 価値形態論をめぐるマルクスとエンゲルス
 - 2 論理的なものの歴史化

IV 価値形態論の課題と論理＝歴史説

はじめにも指摘したように、初版本文の価値形態論では貨幣形態が存在せず、貨幣の発生はそれに続く交換過程論ではじめて論じられているのに対して、第2版(現行版)での価値形態論は最初から貨幣発生論として立

論されているといつてよいが、このような初版本文から第2版への価値形態論叙述の変更は、初版本文においてはけっして生ずることのなかった新たな問題を生み出すこととなった。いうまでもなく、価値形態論と交換過程論における二通りの貨幣発生論をいかに理解すべきかという問題である。そしてそれがいかに多くの研究者を困惑させるものであったかは、次にあげる久留間鮫造の率直な告白にあきらかであろう。

「特に価値形態論と交換過程論との関係、これが、……ずいぶん長いあいだわたくしを苦しめた。どちらを読んでみても、貨幣がどのようにしてできるかについて論じているように思われる。ところがその論じかたを見てみると、全くちがっている。そのちがいは、本質的にはどういう点にあるのか。これがなかなかわからない。」¹

ここに見られるような価値形態論と交換過程論における二重の貨幣発生論という久留間を悩ませた難問は、しかしながらわれわれの理解によれば、ただたんに初版本文から初版付録を経て第2版（現行版）に至る価値形態論叙述の論理＝歴史説的な通俗化の結果として生じたものにすぎないといえよう。まさにその意味で、初版本文を価値形態論の最良のテキストと考えるわれわれにとって、このような問題自体最初から存在しえないといつて過言でない。

そればかりでない。もしわれわれが現行版価値形態論ではなく初版本文の価値形態論に徹底して内在し続けるなら、それに続く交換過程論におけるマルクスの貨幣発生論の正当性も一転してきわめて疑わしいものとなる

1 久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』岩波書店、1957年、2ページ。なおその他にも初版本文と現行版との比較を通じて価値形態論と交換過程論の関連を論じた文献は数多く見られるが、代表的なものとして、中野正『価値形態論』日本評論新社、1958年（『中野正著作集』第1巻、日本評論社、1987年、所収）、富塚良三『価値形態論と交換過程論——とくに〈全面的外化〉の矛盾について——』（『増補恐慌論研究』未来社、1975年、所収）、竹永進『価値形態論と交換過程論』『経済学雑誌』第86巻第6号、1986年3月、吉田紘『商品範疇と貨幣生成の論理』梓出版社、1988年、を参照されたい。

であろう。なぜなら、以下に詳しく見るように、マルクスはそこで「交換過程の必然的産物²」としての貨幣生成の論証に成功しているとはいいいがたいからである。その意味でわれわれは、従来の価値形態論と交換過程論における二重の貨幣発生論という現行版に固有の上記の問題を、いまや初版本文に即して次のようにいいかえなければならないであろう。すなわち、真に問われるべきは、価値形態論と交換過程論においてなぜマルクスが二通りの貨幣発生論を与えているのかということではなく、全く逆に、なぜマルクスは価値形態論と交換過程論の双方を通じて貨幣形態の理論的導出に成功しなかったのかということではなければならない、と。実際、少なくとも初版本文を見るかぎり、マルクスは貨幣形態の理論的導出に二度失敗しているのである。最初は価値形態論において、二度目は交換過程論において、である。

とはいえ、このような初版本文における貨幣形態導出の二重の失敗は、われわれの理解によれば、初版本文でのマルクスの理論的未成熟を示すたんなるエピソードと見なされてはならないであろう。逆である。なぜならマルクスはそこで全く正当な理由で貨幣形態の導出に失敗しているからである。そしてまさにそこでのマルクスの貨幣導出の失敗とこの失敗の完全な正当性を余すところなく伝えるものこそ、初版本文の価値形態論叙述を他のなににもまして特徴づける形態Ⅳにほかならない。

1 初版本文形態Ⅳにおける貨幣導出のアポリア

初版本文価値形態論においても出発点はいうまでもなく貨幣以前の価値形態論、すなわち x 量の商品 A = y 量の商品 B であり、この点では現行版となら変わるところがないといってよい。これに対して初版本文の際立って独自の点は、そこでの形態Ⅰから形態Ⅳに至る価値形態の「発展」

2 K. Marx, Das Kapital, Bd. 1, MEW Bd. 23, Dietz Verlag, Berlin, 1968, S. 102.

が、初版付録や現行版にはっきりと認められる論理＝歴史説の寓話——貨幣以前の「商品形態の歴史的な発展」³——に一切訴えることなく、いうなれば純粹に論理的な展開として考察されているということである。初版本文を特徴づけるこのような価値形態論叙述の論理主義的構成は、従来マルクスの貨幣発生論にとって核心的な役割を担わされてきたといえる形態Ⅱから形態Ⅲへの移行において、如実に示されているといえよう。

たとえばマルクスは初版本文においても、現行版と全く同様に、一商品（リンネル）の他の一商品（上着）の使用価値による価値表現（形態Ⅰ）から出発し、それに続いて、リンネルという「一商品の価値をすべての他の商品の広がりの中で示す、相対的価値の展開された形態（形態Ⅱ）」⁴を提示したあと、この形態Ⅱをたんに転倒することによって形態Ⅲ——「リンネルが一般的な等価物である一般的な相対的価値形態」⁵——の成立を論じているといつてよいであろう。すなわち、次のように。

「第二の形態は、第一の形態の等式の合計からのみ成り立っている。しかし、これらの等式のそれぞれ、たとえば20エレのリンネル＝1着の上着は、その逆の関係、1着の上着＝20エレのリンネルを含んでいるのであって、そこでは上着が自分の価値をリンネルで示しており、まさにそれゆえにリンネルを等価物として示しているのである。ところで、このことはリンネルの無数の相対的価値表現のどれにもあてはまるのだから、そこでわれわれは次のような形態を得るのである。

Ⅲ 相対的価値の第三形態、すなわち、転倒された、または逆の関係にされた第二形態。

1着の上着 = 20エレのリンネル。

3 K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, Erste Auflage, Otto Meissner, Hamburg, 1867, S. 782.

4 *Ibid.*, S. 26.

5 *Ibid.*, S. 29.

| | |
|----------|-----------------------------|
| u 量のコーヒー | =20 エレのリンネル。 |
| v 量の茶 | =20 エレのリンネル。 |
| x 量の鉄 | =20 エレのリンネル。 |
| y 量の小麦 | =20 エレのリンネル。 |
| その他 | =20 エレのリンネル。 ⁶] |

ここに見られるような、形態Ⅱをたんに「逆の関係」にすることによって形態Ⅲを導き出すという、一見するところ現行版と寸分たがわぬように見える初本文での形態Ⅲの導出方法は、しかしながら、仔細に検討するならば、実は現行版とは大きくその含意を異にするものといってよい。すなわちその一つは、周知のように現行版での形態Ⅱではリンネル以外の「どの商品の相対的価値も」「この展開された形態で表現される⁷」ことが事実上前提されているために、そこでの形態Ⅱの転倒による形態Ⅲの導出は、同時に、すべての商品の形態Ⅱの同時存在という状況のなかから一商品（たとえばリンネル）のみが一般的等価物として排除されるという、マルクスの貨幣発生論における「本質的な困難⁸」を解決するものでなければならぬのに対して、初本文ではこの転倒はもっぱらリンネルの形態Ⅱに限定され、したがってそれ自体では現行版でのように貨幣形態（形態Ⅳ）の成立にとっての不可欠の契機をなすものではない——事実初本文では形態Ⅲに続く形態Ⅳは現行版と異なって貨幣形態ではない——ということである。また第二には、現行版では、本来「商品語」でもっぱら語られるはずの価値形態論において、この転倒が、一見物々交換を想起させる商品所持者の視点からも語られているために、現行版における形態Ⅰから

6 *Ibid.*, S. 25–26.

7 Marx, *MEW* Bd. 23, *op. cit.*, S. 78.

8 富塚, 前掲書, 253 ページ。

9 Marx, *MEW*, Bd. 23, *op. cit.*, S. 66.

10 たとえば次のように。「実際、ある人が彼のリンネルを他の多くの商品と交換し、したがってまたリンネルの価値を一連の他の商品で表現するならば、必

形態Ⅳへの発展があたかも物々交換からの貨幣の発生史の理論的表現であるかのように見なされてきたのに対して、初版本文においては価値形態の発展は貨幣の発生史とは無関係に、純粋に論理的な——形式論理的ともいえる——方法によって考察されているということである。

まさにその意味で、初版本文の形態Ⅲは、現行版とは異なって、貨幣発生論の不可欠の契機としてではなく、また金が「社会的慣習」¹¹によって一般的等価物として固定される以前の交換の歴史的発展段階に照応するものとしてでもなく、ただだんに、一般的等価物としての貨幣の概念規定を与えるための純粋に論理的なモデルとして導出されているというべきである。そればかりではない。われわれの理解によれば、このような初版本文での形態Ⅲの論理主義的導出は、同時に、現行版での形態Ⅲの導出方法の致命的な欠陥を白日の下に曝すものであるとって過言でないであろう。この点は、なによりもマルクス自身初版本文で、形態Ⅲに即して一般的等価物としての貨幣の概念規定を詳細に与えたあと再び形態Ⅲの導出方法に触れ、あたかも現行版における形態Ⅲの導出を批判するかのよう、次のように述べているところからもあきらかである。

「とはいえ、われわれの現在の立場においては一般的等価物はまだけつして骨化されてはいない。どのようにして実際にリンネルは一般的等価物に転化させられたのであろうか。それは、リンネルが自分の価値をまず第一に一つの個別的商品において示し(形態Ⅰ)、次にはすべての他の商

、然的に他の多くの商品所持者もまた彼らの商品をリンネルと交換しなければならず、したがってまた彼らのいろいろな商品の価値を同じ第三の商品で、すなわちリンネルで表現しなければならない。」(Ibid., S. 79.) もっとも初版本文で商品所持者が全く想定されていないわけではない。たとえば単純な価値形態での「二人の個別的商品所持者の偶然的な関係」(Das Kapital, Bd. 1, Erste Auflage, op. cit., S. 25.) がそれである。だが、すでに述べたように、初版本文ではこのような商品所持者の視点は価値形態の移行や発展に際してなんの役割も演じていないとってよい。

11 Marx, MEW, Bd. 23, op. cit., S. 84.

品において順次に相対的に示し(形態Ⅱ), こうして逆関係的にすべての他の商品がリンネルにおいて自分たちの価値を相対的に示した(形態Ⅲ), ということによってである。単純な相対的な価値表現は, リンネルの一般的な等価形態がそこから発展してきた萌芽だった。この発展のなかでリンネルは役割を変える。リンネルは, その価値の大きさを一つの他の商品で示すことをもって始め, そして, すべての他の商品の価値表現の材料として役立つことをもって終わる。リンネルに当てはまることは, どの商品にも当てはまる。¹²」

実際, ここでの「リンネルに当てはまることは, どの商品にも当てはまる」という最後の一句ほど, 現行版における形態Ⅲの導出方法をめぐってこれまで投げかけられてきた疑問や批判のどれにもまして, 現行版価値形態論的方法的欠陥を鋭く突いたものはないであろう。なぜなら, われわれの理解によれば, マルクスがここで事実上語っているのは, 貨幣以前の商品による商品の相対的価値表現から出発するかぎり, どの商品の価値表現にも「逆の関係」が存在しているのだから, すべての商品のなかから一商品のみを一般的等価物として排除することは論理的に不可能であるということにほかならないからである。あたかも, 商品による商品の相対的価値表現をいくら積みかさねても, 発展した商品流通を特徴づける貨幣による商品の価値表現の絶対性——貨幣以外での価値表現はありえないという意味で——には到達しえないとでもいうように, である。このことがけっしてわれわれの予断と偏見にもとづくものでないことは, それに続く初版本文形態Ⅳを一読すればあきらかである。

「それゆえ, われわれは, 最後に次のような形態を得るのである。

形態Ⅳ

20 エレのリンネル = 1 着の上着, または = u 量のコーヒー, または

12 Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, Erste Auflage, op. cit., S. 33.

$=v$ 量の茶, または $=x$ 量の鉄, または $=y$ 量の小麦, または =
等々。

1 着の上着 $=20$ エレのリンネル, または $=u$ 量のコーヒー, または
 $=v$ 量の茶, または $=x$ 量の鉄, または $=y$ 量の小麦, または =
等々。

u 量のコーヒー $=20$ エレのリンネル, または $=1$ 着の上着, または
 $=v$ 量の茶, または $=x$ 量の鉄, または $=y$ 量の小麦, または =
等々。

v 量の茶 $=$ ¹³等々。』

一見するところ、マルクスはここでさきにリンネルに即して与えられていた形態Ⅱが実は他のすべての商品についても同様に成立可能であるということ語っているにすぎないであろう。そしてそのかぎりでの形態Ⅳはむしろ現行版の形態Ⅱに等しいというべきである。すでに見たように、初版本文と異なって現行版の形態Ⅱは、たんにリンネルのみならず、他のすべての商品の形態Ⅱの同時存在を前提するものであったからである。

だが、もしそうだとすれば、現行版価値形態論に馴染んだ読者にとってマルクスがいまここでなすべきこととは、現行版の形態Ⅱから形態Ⅲへの移行がそうであるように、たんに一商品リンネルの形態Ⅱの転倒によってでなく、すべての商品の形態Ⅱの同時的転倒を通じていま一度形態Ⅲを、すなわちただ一つの商品によって他のすべての商品の価値が統一的に表示される一般の価値形態を導出することではなければならないことは言を俟たないであろう。しかしながらマルクスがこの初版本文形態Ⅳから導き出している結論は、現行版とは全く逆である。すなわちそれは、このような形態Ⅳから一商品のみを一般的等価物として排除する現行版形態Ⅲへの——ひいてはまた貨幣形態（現行版形態Ⅳ）への——移行は論証不可能である

13 *Ibid.*, S. 34.

ということにほかならないのである。理由はいうまでもないであろう。形態Ⅱのたんなる転倒による形態Ⅲの成立という「リンネルに当てはまることは、どの商品にも当てはまる」からである。かくていまや初版本文のマルクスはこの形態Ⅳがもたらす理論的帰結を次のように総括する。

「しかし、これらの等式のそれぞれは、逆の關係にされれば、上着、コーヒー、茶、等々を一般的等価物として現われさせ、したがってまた上着、コーヒー、茶、等々においての価値表現をすべての他の商品の一般的な相対的価値形態として現われさせる。一般的な等価形態は、つねに、すべての他の商品に対立して、ただ一つの商品だけのものになる。しかし、それは、すべての他の商品に対立して、どの商品のものにもなる。しかし、どの商品もがそれ自身の現物形態をすべての他の商品に対して一般的な等価形態として対立させるとすれば、すべての商品がすべての商品を一一般的等価形態から排除することになり、したがってまた自分自身をもその価値の大きさの社会的に認められる表示から排除することになる。」¹⁴

初版本文の価値形態論は事実上ここで終わる。すなわち、商品世界を構成する n 個の商品の展開された価値形態を形態Ⅳとして提示し、それらを「逆の關係」にすれば n 個の一般的等価物が得られるということを示唆することで、唐突に叙述を終えているのである。だが、いうまでもなく一般的等価物は「ただ一つの商品だけのもの」でなければならないとすれば、このことが意味するのは、結局のところ、すべての商品の価値をただ一つの商品によって表現する一般的等価形態は——したがってまたこの一般的な等価形態がだんに「社会的慣習」によって金に固定されたにすぎない貨幣形態も——事実上成立不可能であるということにほかならないであろう。¹⁵

14 *Ibid.*

15 この点については、竹永、前掲論文、47-48 ページを参照されたい。

幣の理論的導出に完全に失敗しているというべきである。

だとすれば、われわれはいまや、貨幣形態の生成を論証することこそが価値形態論の真の課題であるとする従来のマルクス経済学の常識に従って、以上のような初本文の価値形態論を、いふならばマルクスの理論的未熟さゆえの壮大な失敗作と見なすべきであろうか。

これに対するわれわれの答は、断じて否である。なぜなら、これまで見たところからもあきらかなように、初本文価値形態論においてマルクスはこれ以上間然するところのない正当な理由で貨幣形態の導出に失敗しているからである。というより、われわれの理解によれば、すでに見たような初本文の形態Ⅳこそ、貨幣以前の諸商品の価値表現という理論的虚構から出発するかぎり、発展した商品流通を特徴づける貨幣形態の理論的導出は不可能であることを、異論の余地のない程明白に〈論証〉するものにほかならないであろう。その意味でわれわれはむしろ次のようにいふべきである。逆説的にいえば、初本文の価値形態論は、まさにそこでの貨幣導出の失敗の完全な正当性のゆえに、貨幣以前の商品世界という理論的虚構から出発するマルクスの貨幣発生論の問題構制——いふならば「貨幣のない社会、貨幣のない交換」から出発して「貨幣を生成させる」¹⁶という古典派以来の「古い問題構制」——に対する、「最もラディカルな批判となっている」¹⁷、と。それに比べれば、一見貨幣形態の導出に成功しているかのように見える現行版価値形態論は、のちにも見るように、「社会的慣習」や「商品世界の共同の仕事」¹⁸といった無内容なフレーズを駆使することによって、初本文形態Ⅳではっきりと示されている貨幣発生論のアポリアを隠蔽し、問題の真の所在を糊塗するものにほかならないといふべきであ

16 吉沢英成『貨幣と象徴』日本経済新聞社、1981年、109ページ。

17 C. Benetti, J. Cartelier, *Marchands, salariat et capitalistes*, Maspero, Paris, 1980, p. 150.

18 Marx, *MEW*, Bd. 23, *op. cit.*, S. 80.

る。

だが、初版本文価値形態論における貨幣導出の失敗にもかかわらず依然として古典派以来の貨幣発生論の「古い問題構制」に固執し続けるマルクスは、価値形態論に続いていまだ一度貨幣生成の論証に失敗を余儀なくされるのである。交換過程論における貨幣発生論がそれである。

2 貨幣以前の交換過程論

周知のように、諸商品の価値関係が——すでに見たようないくつかの例外はあるにせよ——主として「商品語」で語られている価値形態論に対して、それに続く交換過程論をなによりも特徴づけるものは、「商品の代理人¹⁹」としての人間、すなわち商品所持者の存在が最初から前提されているということである。だとすれば、このような交換過程論における商品所持者という主体的契機の導入は、さきにも見たような初版本文の価値形態論では論理的に不可能とされてきた貨幣形態の導出を可能とするものであろうか。

結論からいえば、こうした交換過程論における商品所持者の存在もまた、初版本文形態Ⅳに象徴される貨幣導出のアポリアをなんら解決するものではないであろう。理由は明白である。第一に、交換過程論の冒頭でマルクス自身ははっきりと述べているように、ここでの商品所持者という「人々(Personen)の経済的扮装は、ただ経済的諸関係の人格化(Personificationen)²⁰」にすぎず、したがって「人々はここではただ、彼らがなんらかの物を諸商品として互いに関係させることによってのみ、互いに関係しあう」のだから、ここでの彼らの「関係のすべての規定は、商品としての物

19 Marx, *MEW*, Bd. 23, *op. cit.*, S. 100. なお交換過程論については初版と現行版のあいだに本質的な相違は見られないので、引用に際しては現行版を用いることとする。細部の異同については引用の際にその都度指摘する。

20 *Ibid.*

(Sache) の規定のうちに含まれている²¹」からである。その意味で、交換過程論における商品所持者の登場は、それに先行する価値形態論であきらかにされた「商品としての物の規定」になにごとも新たに付け加えるものではない。また第二に、価値形態論における「商品としての物の規定」がすでに見たように貨幣以前の商品の概念規定として与えられているのと全く同様に、ここでの分析の対象である「諸商品の交換過程²²」も、つねに貨幣を捨象した商品所持者の交換関係——貨幣以前の商品交換——として考察されているとあってよいであろう。だがバックハウスにならっていえば、このような貨幣以前の商品交換や貨幣以前の商品所持者なるものは、「貨幣以前の商品という概念」と同様、われわれにとって「思考不可能なもの²³」であり、現実の商品流通のどこにも根拠をもたない理論的虚構というべきである。

以上の点は、価値形態論においてすでに貨幣形態の成立が論証されているかのような現行版ではなく、はじめにも見たように価値形態論が貨幣形態と正反対の形態Ⅳで終わっている初版本文にもっぱら依拠するならば、より一層あきらかとなるであろう。実際、マルクスが交換過程論で貨幣生成の必然性の根拠としてあげているいわゆる交換の矛盾なるものも、初版本文に即していえば、実に、それに先行する価値形態論での形態Ⅳにおける貨幣導出のアポリアを「商品の代理人」たる商品所持者の視点から再現したものにほかならないからである。事実マルクスはそこで、貨幣形態の成立以前にすべての商品所持者が自分の商品を持ちあって市場で相対するという「純粹に擬制的な情況²⁴」を想定し、そこでの交換の矛盾につい

21 Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, Erste Auflage, *op. cit.*, S. 45–46. 初版交換過程論のこの一節は現行版では削除されている。

22 *Ibid.*, S. 45. 初版交換過程論のタイトル。現行版ではたんに「交換過程」。

23 H-G. Backhaus, *Materialien zur Rekonstruktion der Marxschen Werttheorie*, 3, *Gesellschaft*, 11, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1978, S. 38.

24 竹永, 前掲論文, 58 ページ。

て次のように述べている。

「どの商品所有者にとっても、他人の商品のどれもが自分の商品の特殊的等価物とみなされ、したがってまた自分の商品はすべての他の商品の一般的等価物と見なされる。ところが、すべての商品所有者が同じことをするのだから、どの商品も一般的等価物ではなくて、したがってまた諸商品は、それらが互いに価値として等置され価値の大きさとして比較されるための一般的な相対的価値形態をもっていない。したがってまた、諸商品は、けっして商品として相対するのではなく、ただ生産物または使用価値として相対するにすぎないのである。²⁵」

一見してあきらかなように、ここで商品所有者たちが直面している困難は、さきにも見たような初版本形態Ⅳのそれとなんら変わるところがないといえよう。n個の商品の展開された価値形態を「逆の関係」にすればn個の一般的等価物が成立するのであるから、ただ一つの商品のみが一般的等価物として排除される一般的価値形態は事実上成立不可能であるという、初版本形態Ⅳにおける貨幣導出のアポリアが、ここでは商品所有者の視点からあらためて語られているにすぎないからである。すなわち、「どの商品所有者にとっても、他人の商品のどれもが自分の商品の特殊的等価物」であるということ(n個の形態Ⅱ)は、その「逆の関係」として、「自分の商品はすべての他の商品の一般的等価物と見なされる」ということ(n個の一般的等価物)を含むものであり、そしてまた「どの商品所有者も同じことをする」——「リンネル[所有者]に当てはまることはどの商品[所有者]にも当てはまる」——のだから、結局のところ諸商品は、ただ一つの商品によって「それらが互いに価値として等置され価値の大きさとして比較される」一般的価値形態(したがってまた貨幣形態)をもつことができない、というように。そしてその結果、「諸商品は、けっ

25 Marx, MEW, Bd. 23, *op. cit.*, S. 101.

して商品として相対するのではなく、ただ生産物または使用価値として相対するにすぎない」、というように。

だがもしそうだとすれば、われわれにとって、このような貨幣以前の商品所持者たちの交換関係という「純粹に擬制的な情況」から出発する交換過程論における貨幣発生論は、初版本文の価値形態論と同様、最初から失敗を宣告されているとって過言でないであろう。そして実際に、マルクスはこの交換過程論でも貨幣生成の論証に失敗しているのである。たとえば、交換過程論の全体を通じてマルクスが貨幣生成の論証を試みているのは、実際にはただ次の一節にすぎないのである。

「われわれの商品所持者たちは、当惑のあまり、ファウストのように考えこむ。はじめに行ないありき。だから、彼らは、考えるよりまえにすでに行なっていたのである。商品の本性の諸法則は、商品所持者たちの自然本能において自己を実証したのである。彼らが自分たちの商品を互いに価値として関係させ、したがってまた諸商品として関係させることができるのは、ただ、彼らが自分たちの商品を、一般的等価物としてのなんらかの別の一商品に対立的に関係させる、ということによってのみである。このことは、商品の分析があきらかにした。しかし、ただ社会的行為だけが、ある特定の商品を一般的等価物にすることができる。それだから、他のすべての商品の社会的行動が、ある特定の商品を排除し、この商品において他のすべての商品が自分たちの価値を全面的に表わすのである。このことによって、この商品の現物形態は、社会的に認められた等価形態になる。一般的等価物であることは、社会的過程によって、この排除された商品の独自の社会的機能になる。こうして、この商品は——貨幣になるのである。」²⁷

26 初版では「実証しているのである」(*Das Kapital*, Bd. 1, Erste Auflage, *op. cit.*, S. 47.)。

27 Marx, *MEW*, Bd. 23, *op. cit.*, S. 101.

実際、われわれはここに見られるようなマルクスの貨幣生成の論証を、いかなる意味でも、それに先立って当のマルクス自身が初版本文形態Ⅳで設定した貨幣形態導出のアポリアを真の意味で解決することによって与えられたものと見なすことができないであろう。なぜなら、マルクスがここで語っている唯一のことは、貨幣形態が成立するためには「他のすべての商品」が「ある特定の商品」を一般的等価物として排除しなければならぬが、このような一商品の排除はただ商品所持者たちの「社会的行為」によってのみ可能であるということにすぎず、この「社会的行為」の具体的内容については一言も触れられていないからである。というより、マルクスはここでただたんに、歴史上の商品流通はつねに貨幣なしにはありえなかったという自明の事実を追認することによって、彼自身が初本文で提起した貨幣導出のアポリアを解決するのではなく消去しているにすぎないというべきである。そのかぎりでは、以上のような交換過程論におけるマルクスの貨幣発生論に対して、「こういう説明の仕方をもって一個の論証と解し、それによって矛盾の展開が媒介され、運動形態が解明されえたとすことは、まことに理解しがたい論理というほかはない」とする中野正の論難も、無理からぬところといってよいであろう。そしてこのことが意味するのは、現行版を中心とする従来の『資本論』研究の常識とは逆に、マルクスは価値形態論と交換過程論の双方において、「商品の概念から貨幣の概念を導出することに成功しなかった」ということにほかならない。

3 マルクスとポランニー

だが、交換過程論におけるマルクスの貨幣発生論のいま一つの特徴は、

28 『中野正著作集』第1巻、前掲、252 ページ。

29 J. Cartelier, Marx's theory of value, exchange and surplus value: a suggested reformulation, *Cambridge Journal of Economics*, vol. 15, no. 3, 1991, p. 257.

商品所持者という交換の主體的契機を導入することによって、すでに見たような貨幣以前の商品交換（物々交換）から出発する古典派以来の貨幣発生論の虚構性をより一層際立たせているということである。実際、貨幣の必然性をたんに交換の「技術的不便」³⁰に求めるにすぎない古典派に対する執拗な批判にもかかわらず、マルクスが最後まで古典派と共有し続けた貨幣発生論の問題構制を一言で特徴づけるなら、物々交換からの自然発生的な貨幣の生成という寓話、すなわち、ビーバーと鹿との物々交換³¹から始まり、「交換の歴史的な広がり」と深まり³²につれて貨幣が生み出されるという「〈歴史的なもの〉についての純粋な〈寓話〉」³³にはかならない。

「交換から自然発生的に交換手段が生じて、非常に便利であるという理由でこの交換手段が貨幣の他の諸機能を獲得していくという」、古典派とマルクスのみならず、今日の新古典派経済学にも共通して見出されるこの

30 K. Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, MEW, Bd. 13, *op. cit.*, S. 36.

31 たしかにマルクスは古典派の貨幣発生論を「拡大された物々交換がつきあたる外的な諸困難から導きだすのが例となっている」(*Ibid.*)として繰り返し批判しているといつてよいが、にもかかわらず、マルクスもまたある意味で古典派と同様に、貨幣の必然性を物々交換に始まる交換の拡大に求めていることは疑問の余地がない。実際マルクスはいたる所で商品交換と物々交換とを混同している。「交換過程の自然発生的な形態である直接的物々交換」(*Ibid.*)、「最初は直接的物々交換に始まる使用価値と交換価値との分離」(Marx, MEW, Bd. 23, *op. cit.*, S. 184.)、というように。その意味でG・ハインゾーンとO・シュタイガーの次の指摘は正鵠を射たものといえよう。「〈剰余——物々交換による使用価値と交換価値との分離——商品の生産と交換——一般的等価物としての特定の商品——貨幣〉という展開序列によって、マルクスが、彼の批判するブルジョア経済学によるたんなる物々交換からの貨幣の説明を乗り越えることができない思考の枠組みの内部に、依然として留まっていることはあきらかである。」(G. Heinsohn, O. Steiger, *Marx and Keynes—Private property and money, Economies et Société 1 s*, vol. 18, no. 4, 1984, p. 43–44.)

32 Marx, MEW, Bd. 23, *op. cit.*, S. 102. なおこの一句は初版交換過程論には存在せず、第2版で付け加えられたものである。

33 Backhaus, *op. cit.*, S. 44. また前述のハインゾーンとシュタイガーも、「貨幣の起源を商品から説明することの歴史的な証明は、マルクスやエンゲルス、また正統派の歴史家の著作のどこにも存在していない」(Heinsohn, Steiger, *op. cit.*, p. 44–45.) という点でバックハウスと見解を共有している。

ような「交換手段の寓話」³⁴は、しかしながら、われわれの理解によれば、近年の貨幣や市場の歴史的起源についての実証的諸研究によって根底から覆されているとって過言でない。一例をあげれば、非市場社会における原始貨幣の研究を通じて、貨幣が交換手段としての機能を獲得する以前に——まさにその意味で市場の成立と発展に先立って——すでに支払手段、蓄蔵手段、計算手段(価値尺度)として高度な発展を遂げていたと主張するK・ポランニーは、今日の経済学の教科書に今なお数多く見られる「物々交換パラダイム」³⁵による貨幣発生論——「貨幣が存在する以前に」物々交換から市場が発生し「しかるのちにはじめて貨幣がこれらの交換を容易にするために発明される」という「正統派の見解」³⁶——に対して、次のように反論している。「物々交換の困難は、貨幣の〈発明〉にはなんの役割も果たさなかった」³⁷、と。

34 M. Aglietta, A. Orléan, *La violence de la monnaie*, deuxième édition, Press Universitaires de France, Paris, 1984, p.145. (井上泰夫・斎藤日出治訳『貨幣の暴力』法政大学出版局, 1991年, 200ページ。)

35 Heinsohn, Steiger, *op. cit.*, p. 39.

36 L. R. Wray, *Money and credit in capitalist economies*, Edward Elgar, Hants, 1990, p. 4. ちなみにレイ自身の見解は次の通り。「物々交換は市場の発展を導くものではなかったし、貨幣が物々交換のなかから発展したということもありえなかった。実際には、初期の貨幣は交換を促進するために創造されたのではなく、計算単位として創造されたのである。」(*Ibid.*, p. 6.) (人類学者の)「証言が示しているのは、貨幣がまず形成され、市場はそのあとで(しばしば多くの困難を伴って)形成されたということである。」(*Ibid.*, p. 4.)

37 K. Polanyi, *The great transformation*. Beacon Press, Boston, 1957, S. 277. (吉沢英成他訳『大転換——市場社会の形成と崩壊——』東洋経済新報社, 1975年, 376ページ。)たとえばポランニー(表記によつてはボランニー)はいう。「伝統的な貨幣論では、貨幣を主として交換手段だと見なしている。そういうことは、最初にバーターがあるとか、それを促進する行為が存在するということを仮定することでもある。すなわち、求められる財を入手するため、それと交換される貨幣対象物を手に入れるということである。これが経済学者のいう〈間接的交換〉である。現代のような市場経済では、貨幣は主としてこの用法を代表していて、その他の用法はこの土台に従属している。だから、現代の経済学思想の全分野にこの仮定が最も強力にはびこっているのである。」(玉野井芳郎・栗本慎一郎訳『人間の経済』I, 岩波書店, 1980年, 198ページ。)[けれども、このような定義は、問題に近代主義的に接近しすぎたための誤りだと、われわれ

とはいえ、もとより本稿の目的はなによりも発展した商品流通の存立構造をあきらかにすることであって、貨幣や市場の歴史的起源を問うことではない。しかしながら、われわれにとって興味深いことは、ポランニーよりもはるかに制約された歴史資料に依拠しながら、マルクスもまた交換手段に先行する貨幣の歴史的存在に気づいていたということである。この点は『経済学批判要綱』における価値尺度としての貨幣の規定のなかに散見される以下の叙述にあきらかとなっている。

「貨幣の最初の形態は、交換と物々交換との微小な段階に照応する。そこでは貨幣は現実の交換用具としてよりも、まだ、より多く尺度としての規定で現われ出ている。³⁸」

「貨幣は交換手段としてより以前に尺度として（その例としてはホーマーの牡牛）現われている……。」³⁹

「貨幣はそれ以上の諸規定で実現されていなくとも、したがってまた金属貨幣の形態を取る以前に、尺度という規定で、また交換価値の一般的元素 (Element) という規定で、措定されることができる⁴⁰」, 等々。

だが不幸なことに、ここに見られるような『要綱』段階におけるマルクスの交換手段としての貨幣に対する価値尺度もしくは「交換価値の一般的

これは確信している。……明瞭なことは、貨幣は主として交換手段だとみる見解は、貨幣の用法に関する初期の歴史を見ても、それを支持するような事実がまったくわずかしかないということである。(同書、199ページ)。「原始社会およびアルカイックな社会のデータが明らかにすることは、貨幣の交換手段としての用法が、他の貨幣用法を生じたとは言い切れないということである。逆に支払、蓄蔵、計算手段としての用法は、それぞれ独自の起源をもち、相互に独立して制度化されたのであった。」(同書、206ページ)。「交易のいくつかの形態と、さまざまな貨幣の使用が経済生活において重要性を占めるのは、市場とは関係のないことであり、また市場に先立ってのことなのである。」(同書、154ページ。)

38 K. Marx, *Grundrisse der Politischen Ökonomie*, Dietz Verlag, Berlin, 1953, S. 84.

39 *Ibid.*, S. 90.

40 *Ibid.*, S. 107.

元素』としての貨幣の「歴史的先行性の発見⁴¹」は、さきにも見た市場の形成に先行する原始貨幣についてのポランニーらの実証的諸研究とともに、少なくともこれまでのところ一部の論者を除いてわが国の価値形態論や交換過程論の研究のなかで一顧だにされることがなかったといえよう。理由はいうまでもないであろう。貨幣の概念規定は論理的にも歴史的にも貨幣以前の商品から出発して——まさにその意味で「商品の貨幣への転化⁴²」として——与えられなければならないとする論理＝歴史説のドグマが、貨幣や市場の歴史についての様々な発見を黙殺し続けてきたのである。

しかしながら、繰り返し述べてきたように、このような論理＝歴史説のドグマは根本的に撤回されなければならない。というより、もしわれわれが論理＝歴史説のドグマをきっぱりと排することによってマルクスの交換過程論をあらためて読み返すならば、一見古典派以来の物々交換の寓話を体現しているかのように見える交換過程論においてすら、われわれは初版本価値形態論の場合と同様に、叙述の「表層」に現われている貨幣以前の交換過程論とは正反対の、いま一つの交換過程論を見出すことができるであろう。このような二つの交換過程論の交錯を如実に示しているのが、次にあげる一節である。

「直接的生産物交換では、どの商品も、その商品の所持者にとっては直接に交換手段であり、その非所持者にとっては等価物である。といっても、それが非所持者にとって使用価値であるかぎりのことではあるが。つまり、交換される物品は、それ自身の使用価値や交換者の個人的欲望にはかわりのない価値形態をまだ受け取っていないのである。この形態の必然性は、交換過程にはいつてくる商品の数と多様性とが増大するにつれて発展する。課題は、その解決の手段と同時に生まれる。商品所持者たちが

41 武田信照『価値形態と貨幣』梓出版社、1982年、121ページ。

42 Marx, *MEW*, Bd. 23, *op. cit.*, S. 102.

彼ら自身の物品をいろいろな他の物品と交換し比較する交易は、いろいろな商品がいろいろな商品所持者たちによってそれらの交易のなかで一つの同じ第三の商品種類と交換され価値として比較されるということなしには、けっして行なわれないのである。このような第三の商品は、他のいろいろな商品の等価物となることによって、狭い限界のなかではあるが、直接に、一般的な、または社会的な等価形態を受け取る。この一般的等価形態は、それを生み出した一時的な社会的接触とともに発生し消滅する。かわるがわるに、また一時的に、一般的等価形態はあれこれの商品に付着する。しかし商品交換の発展につれて、それは排他的に特別な商品種類だけに固着する。いいかえれば、貨幣形態に結晶する。⁴³」

一見するところ、「直接的生産物交換」から始まり、「交換過程にはいつてくる商品の数と多様性が増大するにつれて」一般的等価形態が成立し、やがて「貨幣形態に結晶する」というマルクスのこの叙述は、すでに見たような「物々交換パラダイム」による古典派以来の貨幣発生論をたんに粗述しているにすぎないであろう。『要綱』で散見された交換手段に先行する貨幣の歴史的存在への言及も、ここでは跡形もなく消え去っているといつてよい。とはいえ、もしわれわれが以上の引用文中の次の一句に着目するならば、事態は一変するであろう。すなわち、「商品所持者たちが彼ら自身の物品をいろいろな他の物品と交換し比較する交易は、いろいろな商品がいろいろな商品所持者たちによってそれらの交易のなかで一つの同じ第三の商品種類と交換され価値として比較されるということなしには、けっして行なわれない (傍点——引用者)」という一句である。

実際、われわれはここに叙述の「表層」における貨幣以前の交換過程論

43 *Ibid.*, S. 103. なお文中の「商品所持者たちが彼ら自身の物品をいろいろな他の物品と交換し比較する交易」は、初版では、「商品所持者たちに彼ら自身の物品をいろいろな他の物品と交換させ、したがってまた比較させる交易」(*Das Kapital*, Bd. 1, Erste Auflage, *op. cit.*, S. 49.)

とは根本的に問題構制を異にするいま一つの交換過程論、いふなれば形態Ⅰからでなく形態Ⅲから出発する交換過程論を見出すことができるであろう。そればかりではない。われわれはここから、「諸商品の交換過程の必然的産物」という貨幣についての古典派以来の「古い答」と真向うから対立するマルクスの「新しい答」を導き出すことすら可能である。すなわちそれは、「諸商品の交換過程」、一言でいえば市場は、物々交換とは異なっており、たとえ「狭い限界のなか」であれ、「使用価値や交換者の個人的欲望にはかかわりのない」一般的等価形態の成立なしには「けっして行なわれない」ということ、まさにその意味で、一般的等価物としての貨幣は「諸商品の交換過程の必然的産物」ではなく、反対に貨幣こそが「諸商品の交換過程」にとっての不可欠の前提——「先験的前提条件」⁴⁴——にはほかならないということである。

だが、もとよりマルクスは、このような一般的等価物（貨幣）と「諸商品の交換過程」（市場）との論理的序列の逆転という「新しい答」を、たとえば先のポランニーのように、貨幣や市場の起源をめぐる実証的研究から導き出しているのではない。むしろポランニーとは全く別のルートを辿って、すなわち、初版本文価値形態論に見られるような発展した商品流通の純粋に論理的な分析を通じてである。実際、以下に詳しく見るように、初版本文における物々交換の寓話に訴えることのない純粋に論理的な価値形態分析を通じて、マルクスは「商品の貨幣への転化」という彼自身の論理＝歴史説との正反対の、いふなれば発展した商品流通を特徴づける、商品形態に対する貨幣形態の論理的先行性という「新しい答」を事実上創造しているといって過言でない。そして、われわれの理解によれば、商品と貨幣についてのマルクスのこの「新しい答」を初版本文のなかで他のなに

44 M. Williams, *Marxists on money, value and labour-power: a response to Cartelier*, *Cambridge Journal of Economics*, vol. 16, no. 4, 1992, p. 441.

にもまして明瞭に示しているのが、従来わが国の価値形態論研究のなかで幾度となく論じられてきながら、結局のところ貨幣以前の商品による商品の価値表現という理論的虚構のなかでしか語られるにすぎず、発展した商品流通における商品・貨幣関係の存立構造論としてついに理解されることのなかった、商品の価値表現に特有のいわゆる「回り道」の論理である。

4 初版本文における価値表現の「回り道」

初版本文価値形態論で、マルクスは商品の価値表現に特有の「回り道」について二度言及している。形態Ⅰと形態Ⅲにおいてである。両者には本質的な相異は存在しないが、われわれはさしあたり形態Ⅰに即してこの「回り道」の意味するところをあきらかにしてみよう。

周知のように、マルクスは『資本論』の冒頭で資本主義的生産様式についての「われわれの研究は商品から始まる⁴⁵」と述べ、使用価値と価値との統一物という商品の概念規定を、貨幣の概念規定に先立ってただちに与えているといえよう。そして、冒頭商品論における価値の実体規定のみならず、それに続く価値形態分析においても論証の必要もない程自明の前提とされてきたこのような貨幣以前の商品という概念が、われわれにとっては「思考不可能なもの」であり純粋なフィクションにはかならないことも、すでに指摘した通りである。しかしながら、もしわれわれが価値形態論における「回り道」の論理をもつばら初版本文に従って検討するならば、われわれは、使用価値と価値との統一物という商品の概念規定が、実は以下に見るような論理的階梯を経てはじめて成立可能であることを確かめることができるであろう。⁴⁶

45 Marx, *MEW*, Bd. 23, *op. cit.*, S. 49.

46 周知のように第2版(現行版)における「回り道」は、商品の価値表現に特有なメカニズムとしてばかりでなく、なおそのうえに諸商品の交換的等置による労働価値論の論証という困難な課題をも課せられているために、信じがたい。

I 「商品は、もともと一つの二重物、使用価値にして価値……である。それゆえ、自分をそのあるがままのものとして表わすためには、商品はその形態を二重化しなければならない。⁴⁷」

II 「使用価値という形態は、商品が生まれながらにもっているものである。それは商品の現物形態である。価値形態は、商品が他の諸商品とのかわり (Umgang) のなかではじめて得るものである。……ところで、商品の、たとえばリンネルの、現物形態は、商品の価値形態の正反対物であるから、商品は、別の現物形態を、別の商品の現物形態を、自分の価値形態にしなければならない。商品は、自分自身に対して直接にすることができないことを、他の商品に対して直接に、したがってまた回り道をして自分自身に対して、することができるのである。商品は自分の価値を自分自身の身体において、すなわち自分自身の使用価値において、表現することはできないのであるが、しかし、直接的価値定在としての他の使用価値すなわち商品体に関係することはできるのである。……そのために商品が必要とするのは、ただ、他の商品を等価物として自分に等置する、ということだけである。⁴⁸」

III 「リンネルは、こうして自分を〔現物形態と価値形態という——引用者〕自分自身のなかで区別されたものとして表わすことによつてはじめて、自分を現実の商品——同時に価値でもある有用物——として表わすのである。⁴⁹」

ここにはっきりと示されているように、少なくとも初版本文を見るかぎ

∨ ほどの難解な議論となっている。(Vgl. MEW, Bd. 23, op. cit., S. 65.) それゆえ本稿では、問題を複雑化しないためにあえて第2版での「回り道」を無視し、マルクスにおける「回り道」の論理を最も純粹に表わしている初版本文にもっぱら依拠することとする。

47 Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, Erste Auflage, op. cit., S. 20.

48 *Ibid.*

49 *Ibid.*, S. 16.

り、いわゆる「回り道」の論理は、Iにおける使用価値と価値との統一物という商品の概念規定を現実的なものとして措定するための不可欠な階梯として位置づけられているとあってよいであろう。あたかもⅢにおける商品の概念規定の現実的措定——「同時に価値でもある有用物」としての商品形態の成立——は、Ⅱにおける「回り道」を経てはじめて完成されるというように、である。

だが、一商品、たとえばリンネルが「他の商品を等価物として自分に等置する」——別のいい方をすれば「他の商品を価値として自分に等置する」⁵⁰——という、商品の価値表現に特有のこの「回り道」は、リンネルとこの「他の商品」、たとえば上着との関係にとっていかなる意味をもつものであろうか。いいかえれば、このような上着の現物形態によるリンネルの価値表現は、リンネルと上着との関係をどのようなものへと変容させるであろうか。マルクス自身、初版本文のなかでこの点を自問しつつ、次のように答えている。

「上着でのリンネル価値の表現は、上着そのものに一つの新たな形態を刻印する。実際、リンネルの価値形態はなにを意味するのだろうか。上着がリンネルと交換可能であるということである。そのあるがままの姿で、

50 *Ibid.* 原文は次の通り。sie die andre Waare sich als Werth gleichsetzt……。ちなみに岡崎次郎訳では「他の商品に自分を価値として等置する」(『資本論第一巻初版』国民文庫、1976年、45ページ)、江夏美千穂訳では「自分を他の商品に価値として等置する」(『初版資本論』幻燈社、1983年、35ページ)となっているが、いずれもあきらかに誤訳である。すでに40年以上も前に久留間鮫造によって指摘されたのと同じ誤訳が今日に至るまで改善されていないのは、その文法上の誤りの明白さを考えれば信じがたいことといわねばならない。実際、われわれの理解によれば、もしリンネルが自分自身で「他の商品に自分を価値として等置する」ことが可能ならば、貨幣による商品の価値表現の必然性そのものが消去されることになるであろう。もっとも、久留間がそうであったように、この問題が貨幣以前の商品の価値表現という理論的虚構の内部で論じられているかぎり、翻訳上の問題としてはともかく、内容的には「大したことじゃない」(宇野弘蔵『資本論五十年』下、法政大学出版局、1970年、714ページ)とあっていいのかもしれないが。

すなわち上着というその現物形態において、いまや上着は他の商品との直接的交換可能性の形態を、交換可能な使用価値すなわち等価物という形態を、もっているのである。⁵¹」

全体としてはなお貨幣以前の二商品の価値関係という古典派以来の「古い問題構制」の内部に留まっているといえ、もしわれわれが、ここでマルクスのいうリンネルと上着との関係を、発展した商品流通を特徴づける相互に不可分で非対称的な両極としての商品と貨幣との関係として把え返すならば、この「回り道」の意味するところは全くあきらかとなるであろう。すなわち、リンネルは自分自身の現物形態のままでは「自分を現実の商品として」「表わす」ことができないということ、まさにそれゆえに自分以外のなにかあるもの（たとえば上着）に「直接的交換可能性の形態」を——要するに貨幣形態を——「刻印する」ことなしには、「使用対象であると同時に価値の担い手である」「商品という形態をもつ」⁵²ことすらできないということである。逆にいえば、リンネルは上着を貨幣に「転化」することによってはじめて、自分自身をたんなる使用対象から商品へと「転化」させることができるということである。まさにその意味で、われわれがこのような初版本文価値形態論の「回り道」の論理から事実上導き出すことのできる結論とは、「商品の貨幣への転化」というフレーズに端的に示されているような叙述の「表層」におけるマルクスの論理＝歴史説とは全く逆に、純粋に論理的な観点からいえば、商品形態の成立にとって貨幣形態の成立がつねに先行していなければならないということ、その意味でマルクスの論理的出发点である使用価値と価値との統一物としての商品の概念規定そのものも、実は貨幣の存在をすでに前提しているということにほかならないであろう。⁵³この点は初版本文形態Ⅲでの「回り道」を一

51 *Ibid.*, S. 17.

52 Marx, *MEW*, Bd. 23, *op. cit.*, S. 62.

53 以上のような「回り道」についてのわれわれの見解は、けっしてわれわれの

読すれば、一層明白なものとなるであろう。

「諸商品の一般的な相対的価値表現においては、それぞれの商品、上着やコーヒーや茶などが、それらの現物形態とは違った価値形態を、すなわちリンネルという形態を、もっている。そして、まさにこの形態においてこそ諸商品は、交換可能なものとして、しかも量的に規定された比率で交換可能なものとして、互いに関係しあうのである。……すべての商品が一つの同じ商品において自分たちを価値の大きさとして映し出すことによって、それらは互いに価値の大きさとして映りあうのである。しかし、これらの商品が使用対象としてもっている現物形態がそれらにとって価値の現象形態として互いに認められるのは、ただこのような回り道を経ることによってのみであり、したがって直接的にはではない。それゆえ、それらは直接的であるかぎり、直接には交換可能でないのである。だから、それらは

↘ 恣意的な『資本論』解釈によるものではなく、むしろそのほとんどを「回り道」についてのわが国の権威というべき久留間鮫造の解釈に負っているといつて過言でない。この点は、久留間『貨幣論』（大月書店、1979年）における久留間と大谷禎之介との対談を一読すればあきらかである。

久留間「ほくが「回り道」ということと言いたかったのは、「リンネルは、自分に上着を価値物として等置することによって上着に価値体としての……形態規定性を与え、これによって、はじめて自分も価値物であることを表現するのだ、ということなのです。」（同書、115-116ページ。）

大谷「リンネルが上着を自分に価値物として等置する行為によって、リンネルの価値が表現される。そのさいここには二つのモメント、契機がある。一つは、上着を……価値体にするモメント、もう一つはリンネルが自分も価値であることを表現するモメントです。先生が主張されたのは、この二つのモメントの論理的關係であって、後者の、リンネルが自分も価値であることを表現する、というのは、価値体によってでしかない、ところが上着そのものは価値体ではないのですから、このモメントには上着を価値体にするという前者のモメントが先行しなければならない、こういう関係だろうと思うのです。」（同書、102-103ページ。）

見られるように、少なくとも『資本論』解釈に関するかぎり、われわれは久留間や大谷と完全に一致しているといえよう。決定的な相違は、われわれがこの「回り道」の論理を現実の商品流通における商品・貨幣関係の存立構造論として把え返そうとしているのに対して、久留間や大谷が依然としてそれを貨幣以前の商品による商品の価値表現という理論的虚構のなかで語り続けているという点にあるというべきである。

互いにとつての直接的交換可能性の形態をもっていないのであり、いいかえれば、それらの〔商品形態という——引用者〕社会的に妥当な形態とは、〔貨幣形態によって——引用者〕媒介された形態なのである。⁵⁴」

実際、使用価値と価値との統一物としての商品形態が、実は貨幣形態によってつねに「媒介された形態」にはかならないという、ここでの「回り道」の論理ほど、たんに一商品の価値表現のみならず、むしろ商品世界全体の存立構造についてのマルクスの「新しい答」を如実に物語るものはないといってよいであろう。すなわち、市場に存在する多種多様な使用対象(財およびサービス)は、それらの現物形態とは異なる統一的な価値形態としての貨幣形態によって「媒介」されることなしには、相互に「交換可能なもの」として——要するに商品という「社会的に妥当な形態」として——「互いに関係しあう」ことができない、というように。したがってまた、全面的商品交換の場としての市場そのものも成立不可能である、というように。

いずれにせよ、以上が初版本文における「回り道」の論理であり、さらにいえば、われわれがそこから導き出すことのできる商品と貨幣についての全く新たな概念規定である。その意味からすれば、価値形態論と交換過程論をめぐる真の問題は、従来もっぱら現行版に即して論じられてきた二重の貨幣発生論にあるのではない。むしろ、初版本文にはっきりと示されているような、叙述の「表層」における古典派以来の「古い問題構制」とその「深層」におけるマルクスの「新しい答」との交錯と亀裂にこそ存在するというべきである。すでに見たような初版本文での貨幣導出の失敗も、われわれの理解によれば、実は、貨幣が交換から発生するという古典派以来の「古い問題構制」と、貨幣はむしろ商品交換(市場)にとつての「先験的前提条件」にはかならないとするマルクスの「新しい答」との、

54 Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, Erste Auflage, *op. cit.*, S. 30.

深刻な葛藤の所産であるといつて過言でないであろう。

とはいえ、われわれはマルクスの叙述を貫通する二つの相異なる価値論のパラダイムの交錯や亀裂にこれ以上内在し続ける必要はないであろう。われわれはすでに商品と貨幣の概念規定についてのマルクスの「新しい答」を手に行しているからである。実際、もしわれわれがマルクスのこの「新しい答」にひとたび立脚するならば、労働価値論や貨幣商品説のドグマとともに、商品と貨幣の概念規定をめぐる論理＝歴史説のドグマも一瞬のうちに無意味なものとなるであろう。すなわち、次のように。

第一に、単純な価値形態（形態Ⅰ）に始まり、形態Ⅱのたんなる転倒による形態Ⅲの導出を経て、貨幣形態（形態Ⅳ）にまで至る現行版価値形態論叙述に無批判に立脚することによって、マルクスの価値形態論を物々交換からの貨幣発生論に還元してしまうエンゲルス以来の通俗的な論理＝歴史説は、かつての〈正統的〉マルクス主義者から今日の廣松⁵⁵に至るまで跡を絶たないといつてよいが、それらはいずれも、たんに貨幣や市場の歴史的起源についての最近の諸研究の成果に照らしてというばかりでなく、初版本文の価値形態分析のなかでマルクスが創造している商品と貨幣についての「新しい答」から見ても、もはや陳腐なお伽話にすぎないといふべきである。このようなエンゲルス以来の論理＝歴史説のドグマがマルクスの叙述のなかに十分な根拠をもっていることはすでに指摘した通りであるが、今日われわれが貨幣以前の商品から出発するマルクスの「古い問題構制」に、したがってまた物々交換からの貨幣の発生を意味するにすぎない形態Ⅰ→形態Ⅱ→形態Ⅲ→形態Ⅳ（貨幣形態）という現行版価値形態論の論理的展開序列に、いまなお拘泥し続ける必要は全くないである

55 たとえば廣松渉「貨幣論のためのプレリュード」『現代思想』1977年10月号（『廣松渉コレクション』第4巻、情況出版、1995年、所収）を参照されたい。

う。というより、われわれはいまや初版本文価値形態論の「深層」でマルクスが事実上創造している商品と貨幣についての「新しい答」にもつぱら立脚することによって、現行版価値形態論や交換過程論の「表層」に見られるようなマルクス自身の論理＝歴史説に対して、次のように反論しなければならないであろう。すなわち、貨幣の発生史がどうであれ、「理論的観点からすれば貨幣が商品経済に先行し、商品経済の土台となるのであって、その逆ではない」⁵⁶、と。まさにその意味で、われわれにとって貨幣は、「おそらくマルクスが信じているように市場関係の全面化の帰結ではなく、そのような関係が存在するための前提条件である」⁵⁷のだから、発展した商品流通の理論的叙述に際しては「まさに端初においてすでに前提されているものとして登場するほかない」⁵⁸というべきである。あるいは次のようにもいえよう。マルクスが叙述の「深層」で事実上与えている商品と貨幣についての全く新たな概念規定の「序列は、それらが近代市民社会で相互に対してもっている関係によって規定されているのであって、この関係は」、叙述の「表層」におけるマルクスの論理＝歴史説とは、「全く逆である」⁵⁹、と。

第二に、貨幣以前の商品による商品の価値表現から出発し、形態Ⅱのたんなる転倒によって貨幣を導出するというマルクスの価値形態論的方法的欠陥は、たとえば宇野理論に見られるように、商品所有者の欲望という主体的契機を価値形態論へ積極的に導入すること——いうなれば価値形態論の交換過程論化——によっても、決して克服されないであろう。なぜなら、本稿(2)でも指摘したように、マルクスにならって貨幣以前の商品所持者という前提から出発するかぎり、彼らの商品に対する欲望はつねに特殊

56 Aglietta, Orléan. *op. cit.*, p. 144. (同訳書, 198 ページ。)

57 Cartelier, *op. cit.*, p. 260.

58 *Ibid.*, p. 269.

59 Marx, Grundrisse, *op. cit.*, S. 28.

な使用価値への直接的・個人的欲望に留まり続け、形態Ⅲの成立によってはじめて可能となる「使用価値や交換者の個人的欲望にはかかわりのない」⁶⁰ 一般的欲望への転化が、「論理的に説明できない」⁶¹ からである。というより、最近の宇野派の一部に顕著に見られるように、貨幣形成に先立ってあらかじめ「商品経済的利益の最大化を行動原則とする経済人」を想定し、貨幣がこのような「経済人の行動の中から生成するという論理を構成」⁶² しようとする彼らの試みは、かつてのC・メンガーや今日の新古典派の方法論的個人主義にかぎりなく接近するものといってよいであろう。⁶³ その意味で、われわれの理解によれば、今日の宇野理論による価値形態論の交換過程論化は、結局のところ、貨幣以前の商品所持者というマルクスのドグマを無批判に踏襲し、発展した商品流通としての市場を「経済人」という「理念化された等質的主体」⁶⁴ の集合体へと還元することによって、「純粹に経済的なカテゴリー」⁶⁵ としての貨幣という古典派以来のフィクシ

60 Marx, *MEW*, Bd. 23, *op. cit.*, S. 104.

61 高須賀義博『マルクス経済学の研究』新評論, 1979年, 58ページ。

62 山口重克「思想の言葉」『思想』1986年10月号, 69ページ。

63 事実, 山口は、「マルクスやメンガーや宇野弘蔵らの貨幣発生論は」, 「社会を構成する個人ができるだけ有利な交換を効率的に行わないという要求をもっていることを前提している」という意味では、いわゆる経済人を前提している」(同上)と明言している。

64 Aglietta, *Orléan*, *op. cit.*, p. 28. (同訳書, 25ページ。)

65 Polanyi, *op. cit.*, p. 195. (同訳書, 266ページ。)なお, 古典派経済学における政治的なものと経済的なものとの二分法については、ボランニーの次の指摘を参照されたい。実際そこで彼の古典派経済学批判は今日の宇野原理論に対しても同様に妥当である。「政治の領域と切り離された市場経済というものには存在しえない。ところが、デイヴィッド・リカード以来, 古典派経済学の基礎をなしたのはこうした構成であったし, こうした構成を離れては古典派の概念と諸前提は理解しえない。その〈構想〉によれば, 社会は諸商品——財, 土地, 労働, およびこれらの複合物——を有し, 交換を行なう個人から成り立っていた。貨幣とは, たんに, 商品のうちで他の商品よりも頻繁に交換され, そのため交換に使用する目的で獲得されるものにすぎない。このような〈社会〉は実在しないかもしれないが, しかし, これは古典派経済学者が出発点とした構成の骨格だけにはつくしている。」(*Ibid.*, p. 196. 同訳書, 267ページ。)

ヨンを——したがってまた政治的なものと経済的なものとの古典的二分法を——忠実に再現するものといって過言ではない。

これに対して、われわれの理解によれば、貨幣は歴史上の物々交換からの必然的産物でもなければ、「経済人」という「理念化された等質的主体」の行動の合成された結果でもない。逆である。国家によってであれ、私人の手によってであれ、貨幣の制度的創出こそが、富への際限のない欲望（一般的欲望）を貨幣へと一点集中させることによって商品に対する交換者の欲望を特殊な使用価値に対する直接的・個人的欲望へと転化させ、それによつてはじめて「交換者たちの暴力的な敵対関係を排除⁶⁶」し、いわゆる間接交換のルールを確立することを可能にするのである。いかえれば、貨幣以前の商品と商品の個別的価値関係ではなく、商品と貨幣との逆転不可能な非対称的關係こそが、いふならば価値空間を制度化することによつて、商品世界の「市民⁶⁷」としての諸商品相互の安定的で対称的な関係（全面的商品交換）を可能にし、その「代理人」である商品所有者に効用の最大化を「行動原則」とする「経済人」という「自然本能」を賦与するのであって、逆ではないということである。まさにその意味でわれわれにとって、貨幣はもはや「純粹に経済的なカテゴリー」と見なされることはできない。むしろそれは、全面的商品交換を基本的な社会関係とする「商品社会の統合の源泉⁶⁸」にはかならないというべきである。

66 Aglietta, Orléan, *op. cit.*, p. 33. (同訳書, 33 ページ。) すなわち、アグリエッタとオルレアンによれば、「交換関係の基礎にあるのは、相互的欲望の弁証法であつて形而上学的実体ではないのだから、媒介がなくなれば、交換関係は、欲望の両極の間でしだいに目くらむばかりに激しく変動するほかなくなり、ついには自己崩壊を遂げるほかなくなる。……経済学者にとってなじみの、対称的で安定した物々交換は存在しないのである。」(Ibid., p. 38. 同訳書 41 ページ。) これに対して貨幣は「交換者どうしの諸関係にとって外的な」「制度」として生みだされるのであり、「この制度が敵対する交換者どうしの諸関係に秩序を与えるのである。」(Ibid., p. 40. 同訳書, 45 ページ。)

67 Marx, *MEW*, Bd. 23, *op. cit.*, S. 77.

68 Aglietta, Orléan, *op. cit.*, p. 3. (同訳書, xi ページ。) なお以上の点について

だが、ひるがえっていえば、以上のようなマルクスが初版本文で事実上創造している商品と貨幣についての「新しい答」は、実は、はじめにも指摘したような、なによりもまず、市場に存在する多種多様な使用対象（財およびサービス）がいかにして通約可能なものとなるのかを問うことによって、発展した商品流通（今日の市場）における「貨幣の秘密」をあきらかにしようとした初版本文価値形態論の本源的な問題構制に、正確に照応するものといってよいであろう。その意味からすれば、貨幣以前の価値論という古典派以来の「古い問題構制」から出発しながら、マルクスは初版本文価値形態論の只中で、事実上全く新たな価値論のパラダイムをすでにうちたてていたというべきである。にもかかわらず、初版本文価値形態論において着実に進行していたはずのマルクスの理論的革命は、少なくとも第2版以降、当のマルクス自身の手によって唐突に幕が引かれることに

は、次にあげるポランニーの方法論的個人主義に対する的確な批判をもあわせて参照されたい。「次のように仮定することは自然に見えるかもしれない。すなわち、交易という個別の行為が与えられれば、それはやがて時とともに局地的市場の発展に導くであろうということ、そしてそのような市場は一度存在することになるやいなや、まったく同じように自然なかたちで、国内ないし全国市場の確立に導くであろうという仮定がそれである。しかしそれはいずれも事実とは相容れない。交易や交換という個別の行為——これは疑いえず事実ではあるが——は、一般に、他の経済行動の原理が支配的な社会においては市場の確立に導くことはない。」(Polanyi, *op. cit.*, p. 111. 同訳書, 81 ページ。)
 「もちろん、われわれは、[社会的] 統合を支えるこうしたパターンが、私的、個人的な行為の外ではたらいっている、ある神秘的な力の結果であるといおうとしているのではない。われわれが主張したいのは、いかなる場合にも、個人的行為の社会的効果が明確な制度的条件の存在によって決まるとするならば、その理由からして当然、これらの制度的な条件は当の私的行為の結果ではないということだけである。統合を支えるパターンは、表面的には、対応する種類の集積から生ずるようにはみえるかもしれない。しかし組織と効力という致命的に重要な要素を与えるのは、必ず、まったく別タイプの行動なのである。」「市場システムについても同様のことがあてはまる。個人的レベルでの交換行為が価格を生み出すのは、それが価格決定市場というシステムのもので行なわれる場合のみである。この制度的組み立てが単に任意の交換行為によって作り出されることはありえない。」(玉野井芳郎・平野健一郎編訳『経済の文明史』日本経済新聞社, 1975年, 270-271 ページ。)

なった。いうまでもなく、はじめにも述べたような、初版本文から初版付録を経て第2版において決定的となった価値形態論叙述の通俗化によって、である。

V 第2版における価値形態論叙述の通俗化

1 価値形態論をめぐるマルクスとエンゲルス

はじめにも触れたように、初版『資本論』を特徴づける本文と付録という価値形態論の「二重の叙述」は、第2版で解消されることとなったが、その際マルクスは「第2版後記」のなかで、初版における「二重の叙述」がなにゆえに生じたかについて簡単な説明を与えている。

「第1章第3節(価値形態)は全部書きかえたが、これはすでに初版の二重の叙述から見ても必要なことだった。——ついでにいえば、あの二重の叙述は、私の友人であるハノーヴァーのドクトル・L・クーゲルマンにすすめられて書いたものである。1867年の春に私が彼のもとを訪れていたとき、最初の校正刷がハンブルグからきた。そして、彼は、大多数の読者にとっては価値形態の補足的な、もっと学校教師風の説明が必要だということ⁶⁹を、私に納得させたのである。」

1867年の春の時点でのマルクスとクーゲルマンとの会話がどのようなものであったのかはつまびらかでないが、これを見るかぎり、付録「価値形態」の必要性についてのマルクスの釈明は必ずしも説得的とはいえないであろう。なぜなら、すでに見たように付録「価値形態」は、初版本文価値形態論のたんに「補足的な、もっと学校教師風の説明」に留まらない内容上の本質的な変更を含んでいるからである。端的にいえば、それは初版本文での形態Iから形態IVに至る価値形態分析に対して「学校教師風の説

69 Marx, *MEW*, Bd. 23, *op. cit.*, S. 18.

明]を与えているのではなく、形態Ⅳを貨幣形態とすることによって貨幣発生論としての価値形態論という全く新たな価値形態論を成立させているのである。

のちの第2版での価値形態論の原型となった、叙述の外観もその内容も初版本文と異なるこの付録「価値形態」が、初版本文執筆後にあらためて書き加えられた真の理由は、われわれの理解によれば、クーゲルマンの助言というマルクスの説明よりも、むしろ同時期にマルクスとエンゲルスとのあいだで交わされた往復書簡のなかに求められるべきであろう。事実、以下に見るように、そこに見られるエンゲルスの助言は、おそらくクーゲルマン以上に、付録「価値形態」の叙述内容に無視しがたい影響を与えていると思われるからである。

たとえば、初版本文価値形態論の校正刷に目を通したエンゲルスは、「価値形態の説明のなかのどんな点を、とくに俗人のために付録のなかで一般向きにすればよいか」というマルクスの問いかけ⁷⁰に対して、次のような返答を書き送っている。

「第2 ボーゲンはことにヨウに悩まされた痕跡を帯びているが、もう改める必要はないし、また付録でもうこれ以上それについて書くこともないと思う。というのは、俗人たちはなんといってもこの種の抽象的な思考には慣れていないのだし、おそらく価値形態のために苦勞してくれないだろうからだ。せいぜい、ここで弁証法的に得られた結果がもう少し詳しく歴史的に論証され、いわば歴史によってそれが検証されるだけでよいだろう。といっても、そのためにどうしても必要なことはすでに述べられているのだが。しかし君はこれについては材料をたくさんもっているのだから、おそらくそれについてもうひとつまったく適切な余論を書くことができるだろう。つまり、それによって、俗人のために歴史的な方法で貨幣形

70 K. Marx, Brief an Engels, 3. Juni, 1867, MEW, Bd. 31, op. cit., S. 301.

成の必然性やそのさいに現われる過程を示すわけだ。

君がやった大きな失策は、これらの比較的抽象的な諸展開の思考の筋道をもっと細かい区分や別々の見出しでわかりやすくしなかった、ということだ。君はこの部分を、ヘーゲルのエンチュクロペディーのようなやり方で短い段落で取り扱ったり、それぞれの弁証法的な移行を別々の見出しで目立たせたり、できれば余論やたんなる例解はすべて特別な字体で印刷したりすればよかつたろう。そうすれば、この本はいくらか学校教師風に見えたかもしれないが、非常に大多数の読者にとっては理解が根本的に容易にされたことだろう。⁷¹」

これに対するマルクスの返事は次のようなものであった。

「価値形態の展開についていえば、君の忠告に従ったり従わなかったりした。この点でもまた弁証法的にふるまうためにだ。すなわち、僕は、(1) 同じ事柄をできるだけ簡単に、できるだけ学校教師風に説明するための付録を書き、(2)君の忠告に従ってそれぞれの前進命題に別々の見出しをつけて§§などで区別した。それから序文のなかで〈弁証法的でない〉読者にたいして、x-y ページをとばしてその代わりに付録を読むように、と書く。ここで相手にするのは、たんに俗人だけではなく、知識欲に燃えた若者などでもある。そのうえ、この問題はこの本全体にとってあまりにも決定的だ、経済学者諸氏はこれまで次のようなきわめて簡単なことを見落としてきた。すなわち、20 エレのリンネル=1 着の上着、という形態は、ただ、20 エレのリンネル=2 ポンドのスターリングという形態の未発展の基礎でしかないということ、したがって、商品の価値をまだ他のすべての商品にたいする関係としては表わしてはいないでただその商品自身の現物形態とは違うものとして表わしているだけの、最も単純な商品形態が、貨幣形態の全秘密を含んでおり、したがってまた、労働生産物の一切のブルジョ

71 F. Engels, Brief an Marx, 16. Juni, 1867, MEW, Bd. 31, op. cit., S. 303.

ヨアのな形態の全秘密を縮約して含んでいる、ということがそれだ。⁷²

実際、バックハウスも述べているように、われわれはここに見られるようなマルクスとエンゲルスの往復書簡を一読する時、二人が価値形態論の内容について「全く別のことを考えていたという印象」⁷³を禁じえないであろう。すなわち、マルクスにとって単純な価値形態から始まる価値形態分析の真の課題は、初版本文がそうであるように、発展した商品流通における貨幣の秘密をあきらかにすること、そしてそれによって「現代の貨幣の本質規定を生み出さなければならないという点に存在する」のであって、そのためには「歴史的な証明や例証を全く〈必要〉としない」⁷⁴のに対して、周知のように経済学における「論理的な取り扱い、実際には、ただ歴史的形態と攪乱的な偶然事を除き去った歴史的な取り扱いにほかならない」⁷⁵とするエンゲルスにとっては、なによりも交換の歴史的発展過程における「貨幣形成の必然性」をあきらかにすることであり、しかも「歴史的に論証され、いわば歴史によってそれが検証される」ものでなければならなかった、とでもいうように、である。その意味で、上記のエンゲルスの手紙の——とりわけその前半部での——冷淡ともいえる反応は、初版本文の価値形態論に対するエンゲルスの失望と当惑を如実に物語るものといってよいであろう。なぜなら、すでに述べたように、初版本文価値形態論にはそもそも貨幣形態が存在せず、したがってまた「歴史的な方法で貨幣形成の必然性」を論証する余地など全く存在していなかったからである。

それに対して、マルクスがクーゲルマンとエンゲルスの助言に従って新たに書き上げた付録「価値形態」は、たんに「俗人たち」に理解しやすい

72 Marx, Brief an Engels, 22. Juni, 1867, *MEW*, Bd. 31, *op. cit.*, S. 306.

73 H-G. Backhaus, *Materialien zur Rekonstruktion der Marx'schen Werttheorie*, 2, *Gesellschaft*, 3, Suhrkamp, Frankfurt am Main, 1975, S. 142.

74 *Ibid.*, S. 141.

75 F. Engels, Rezension zu Karl Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie, *MEW*, Bd. 13, *op. cit.*, S. 475.

というばかりでなく、「歴史的な方法で貨幣形成の必然性」を論証しているという点で、エンゲルスを満足させるに充分であったといえよう。事実、のちに付録「価値形態」の校正刷に目を通したエンゲルスは、マルクスに最大級の讃辞を書き送っている。すなわち、「君の価値形態付録については君に敬意を表する。この形でならばどんなに反抗的な頭脳にでも理解させることができる⁷⁶」、と。

だが、それにもかかわらず、少なくとも初版『資本論』に関するかぎり、バックハウスのいわゆる「論理的なものの歴史化⁷⁷」はなお部分的なものに留まっているといえよう。なぜなら、そこでマルクスは、「俗人たち」の理解を容易にするために書かれた付録「価値形態」ではなく、依然として初版本文の価値形態論こそが「この本にとってあまりにも決定的」であるという理由で、その真の理解を「知識欲に燃えた若者」に託していたからである。その意味からすれば、すでに見たような初版『資本論』に特有の価値形態論の「二重の叙述」とは、実は、「俗人たち」のために叙述の歴史化を要求するエンゲルスと、初版本文の難解さを認めつつもなお「知識欲に燃えた若者」に賭けようとするマルクスとの、妥協の産物にはかならなかったといえるかもしれない。

これに対して、「論理的なものの歴史化」による価値形態論叙述の通俗化は、第2版第1章第3節「価値形態または交換価値」の成立とともに決定的なものになったといってよい。なぜなら、そこではマルクス自身の手によって初版本文の価値形態論が放棄され、これに代わって初版付録が——もとより大幅な加筆・修正のうえでではあるが——第2版の本文へと昇格されているからである。だがもしそうだとすれば、われわれはいまや次のようにいわねばならない。すなわち、第2版(現行版)『資本論』と

76 Engels, Brief an Marx, 9. September, *MEW*, Bd. 31, *op. cit.*, S. 341.

77 Backhaus, *Materialien zur Rekonstruktion der Marxschen Werttheorie*, 3, *op. cit.*, S. 43.

は、初版におけるようにたんに「価値の実体と価値の大きさの分析」だけでなく、「この本にとってあまりにも決定的」な価値形態分析さえも、「俗人たち」のために通俗化されてしまった書物にはかならない、と。

2 論理的なものの歴史化

初版本文から第2版に至る価値形態論叙述の通俗化をなによりも特徴づけるものは、初版付録での「リンネル生産者 A と上着生産者とのあいだの物々交換⁷⁸」の例証にすでに認められるように、「論理的なものの歴史化」の結果として、交換過程論の問題構制を特徴づける物々交換からの貨幣の発生という古典派以来の寓話がいまや価値形態分析の只中にまで侵入することとなったということである。だが、それは同時に、はじめにも見たような、発展した商品流通における「貨幣の秘密」の解明という、貨幣発生論に先行する初版本文価値形態論の本源的な問題構制を、根本的に変容させずにはおかないであろう。たとえばマルクスは第2版で、形態Ⅰと形態Ⅱについて次のような歴史的な例証を与えているのである。

「第一の形態は、1着の上着=20エレのリンネル、10ポンドの茶=1/2トンの鉄、などという価値等式を与えた。……この形態が実際にはっきりと現われるのは、ただ、労働生産物が偶然的な時折りの交換によって商品にされるような最初の時期だけのことである。

第二の形態は第一の形態よりももっと完全に一商品の価値をその商品自身の使用価値から区別している。……展開された価値形態がはじめて実際に現われるのは、ある労働生産物、たとえば家畜がもはや例外的にはなくすでに慣習的にいろいろな他の商品と交換されるようになったときのことである。⁷⁹」

78 Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, Erste Auflage, *op. cit.*, S. 765.

79 Marx, *MEW*, Bd. 23, *op. cit.*, S. 80.

だがもしこのように形態Ⅰと形態Ⅱとが歴史上の物々交換の発展段階に照応するものであるとすれば、その必然的帰結として、それに続く形態Ⅲへの発展も、すでに見たような交換過程論における物々交換からの貨幣の発生という古典派以来の寓話へと還元されるほかないであろう。事実、第2版での形態Ⅱから形態Ⅲへの移行は、初版本文でそれに相当する形態Ⅳでマルクスが直面したアポリアをあたかも忘れ去ったごとく、ただ次のように述べられているにすぎない。

「前のほうの二つの形態は、商品の価値を、ただ一つの異種の商品によってであれ、その商品とは別の一連の多数の商品によってであれ、一商品ごとに表現する。どちらの場合にも、自分に一つの価値形態を与えることは、いわば個別商品の私事であって、個別商品は他の諸商品の助力なしにこれをなすとげるのである。他の諸商品は、その商品にたいして、等価物というたんに受動的な役割を演ずる。これに反して、一般的価値形態は、ただ商品世界の共同の仕事としてのみ成立する。一つの商品が一般的価値表現を得るのは、同時に他のすべての商品が自分たちの価値を同じ等価物で表現するからにほかならない。そして、新たに現われるどの商品種類もこれにならわなければならない。⁸⁰」

一読すればあきらかなように、ここでは初版本文形態Ⅳであれほどマルクスを悩ませた貨幣導出のアポリアは、跡形もなく消え去っているといつてよい。だが、いうまでもなくそれは、交換過程論の場合と同様、けっして解決されたのではなく、たんに消去されたにすぎないのである。そのかぎりでは、価値形態論であれ交換過程論であれ、物々交換から出発し「商品世界の共同の仕事」もしくは諸個人の「社会的行為」の結果として貨幣が発生したとするマルクスの貨幣発生論は、「交換手段の寓話」による古典派の貨幣発生論を一步も越えるものではないといって過言でないである

う。というより、もしマルクスの貨幣発生論が以上のようなものに留まるかぎり、それは『資本論』に先立つはるかな昔に、マルクス自身交換過程論で引用している「ヨハネ黙示録」のなかですでに余すところなく語られているといえよう。すなわち、「彼らは心をひとつにして、自分たちの力と権威とを獣に与える。この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもしないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである。(傍点——引用者)⁸¹」まさにその意味で、第2版価値形態論におけるマルクスは、初版本文価値形態論での正当な失敗よりも交換過程論での無内容な成功を選択したというべきである。

だがもしそうだとすれば、われわれは、たとえばW・シュヴァルツのいうように、第2版の価値形態論が初版本文との本質的な変化を含むものではなく、ただたんに「1867年のエンゲルスの要請」⁸²に応じて読者への「より大きな影響力を目指した叙述」⁸³であり、その結果「弁証法の鋭さ」⁸⁴が「犠牲」となっているにすぎないとして、いまなお現行版価値形態論の正当性を擁護し続けることが可能であろうか。われわれの答は、あきらかに否である。なぜなら、繰り返すように、われわれにとって第2版における叙述の通俗化は、初版本文での純粹に論理的な価値形態分析の通俗化ではなく、むしろ交換過程論に端的に示されているような古典派以来の貨幣発生論の「古い問題構制」への先祖返りを意味するものにはかならなかつたからである。⁸⁵そしてそれによって、マルクスが初版本文で事実上創

81 *Ibid.*, S. 101.

82 W. Schwarz, Die Geldform in der 1. und 2. Auflage des „Kapital“. Zur Diskussion um die „Historisierung“ der Wertformanalyse, *Marxistische Studien, Jahrbuch des IMSE*, 12, 1987, S. 212.

83 *Ibid.*, S. 213.

84 *Ibid.*, S. 212.

85 周知のように、最近復刻版が出版されたマルクスの改訂によるJ・モスト『資本論入門』第2版には、現行版価値形態論をさらに通俗化した物々交換からの貨幣発生論が見いだされるといえよう。実際、シュヴァルツもいうように、

造している商品と貨幣についての「新しい答」もまた、叙述の「深層」に再び封じ込められたとって過言でないであろう。

たしかに、初版本文から初版付録を経て第2版(現行版)に至る一連の価値形態論叙述の変更は、物々交換からの貨幣の発生という「俗人たち」の通俗的な表象に訴えかけることによって、貨幣発生論としての価値形態論の外見上の〈成功〉をもたらしたといえるかもしれない。だが、少なくともわれわれの理解するかぎり、この瞬間から、マルクスの価値形態分析の本源的な問題構制を最も純粹に体现している初本文価値形態論は、「知識欲に燃えた若者」にとって永遠に失われた叙述^{ニヒス}となってしまったのである。

(未完)

- ㄨ そこでマルクスは、シベリアの狩猟種族の物々交換を例にあげ現行版での「四つの発展段階を」「簡潔に」「要約」することで、「単純な価値形態(毛皮が塩と交換される)からの貨幣形態の出現が、商品交換の一般化と必然的に結びついた客観的過程であることをわからせている」(KOMMENTAR zu der Karl Marx überarbeiteten zweiten Auflage des populären Auszugs aus Das Kapital von Johann Most aus dem Jahre 1876, Herausgegeben von der Marx-Engels-Stiftung, Wuppertal, 1985, S. 35. 大谷禎之介訳『モスト原著・マルクス改訂「資本論入門」コメンタール』岩波書店, 1986年, 55ページ)といてよいが、われわれの理解によれば、それは、本文でも見たような古典派以来の「物々交換パラダイム」をあからさまに示すものにほかならないであろう。その意味で、これをもって価値形態論の「解釈・論争の様態を一変する筈である」とする廣松の肯定的な評価(同『存在と意味』第2巻, 岩波書店, 1993年, xviiiページ)は、われわれにとって、初版付録に始まる価値形態論叙述の通俗化に無批判に追従するものというべきである。なお、このような廣松の見解を代弁するものとして、吉田憲夫「〈価値形態論〉の地平」『情況』1993年10月号(同『資本論の思想』情況出版, 1995年, 所収)を参照されたい。